

第7回京都市未来共創チーム会議 議事録

日 時：令和7年5月29日（木）15：00～17：55

会 場：QUESTION7階 Creative Commons

出席者：

池坊 専宗	華道家・写真家
伊住 禮次朗	茶道総合資料館副館長
大井 葉月	京都市職員（産業観光局）
大竹 莉瑚	市民公募委員
田口 成人	京都市職員（都市計画局）
都地 耕喜	EVER 株式会社 代表取締役
仲田 匡志	株式会社 SOU 代表取締役/U35-KYOTO プロジェクトマネージャー

以上7名
（五十音順、敬称略）

1 開会

2 議事

(1) 長期ビジョン（仮称）本文（案）に係る議論

司会

本日は2つの議題について議論していただく。1つ目は、長期ビジョン草案に対する所感の共有である。2つ目は、長期ビジョンの策定後、どのように浸透させていくかについてである。なお、本日はグラフィック・ファシリテーションの手法を用いて、議論の内容を可視化しながら進めていきたいと思う。

それでは、1つ目の議題に入る前に、市長から御挨拶を頂戴したい。

松井市長

お忙しい中お集まりいただき感謝申し上げます。本日もぜひ実りある議論をしていただきたい。長期ビジョンという名称については、あまりカタカナを使わない方が良いと思っており、その辺りも含めて御意見をいただきたいのだが、野村特別委員に長期ビジョンの草案を作成していただくにあたって、私から野村特別委員に対してお願いしたことがいくつかある。そのことについて、最初に説明させていただく。

0. 1市民という考え方は非常に興味深い考え方で、野村特別委員も頷きながら聞いていた。0. 1市民という言葉自体は草案には入っていない。ただ、私なりに解釈した0. 1市民とは、その受け止めは様々であって、いくら行政や審議会が立派な文章を書いたとしても、立派な文章だと思われるだけで終わってしまったら意味がない。0. 1市民と余白の2つが私の心には刺さった。

0. 1市民がキーワードになるとすると、京都市民だけでなく、京都に関わりのある人たちにも訴求するような文章であってほしいと思うし、余白についても、哲学者がきれいな文章を書いて、「立派ですね」だけで終わると余白がない。長期ビジョン本文のどこに共感し、どこに違和感を覚えるのかは人によって様々で良いと思う。できれば、5年後、10年後、25年後の、例えば中学生たちがいろいろな受け止め方をして、フィードバックをしてくれることが、共創チーム会議が大切にしたい余白という価値観だと理解した。だから、この手の計画では珍しいが、最終章を読む人に呼びかける形式にしていってほしいと野村特別委員に依頼した。

また、0. 1市民ということに関しては、今後の京都のまちづくりにもつながるが、京都に住んでいなくても、京都で仕事をしていなくても、京都ファンはたくさんいる。抽象的に京都というよりは、京都のこの師匠、この職人、この老舗のこの姿勢といった、様々な京都に対する具体的な愛着の集合体が京都愛だと思っている。そういった愛着の根源となるような、愛着を引き寄せている磁力の元のような人たちが、今後5年から10年の間で現役を引退されたり、場合によっては高齢で旅立ってしまわれたりする。次の世代につなげられないことが非常に残念である。それをきちんとつなげることが、私にとって一番重要な仕事である。

京都には職人や芸術家以外にも、サイエンスやスポーツ、武道など様々な分野において、多くの人から憧れられるような人が大勢いるまちである。私はこれを「京都学藝衆」と呼んでいる。「学藝」という言葉のイメージからすると、文化や芸術、大学を連想されるかもしれないが、京都は街中に匠のような人たちの技や、その人たちが持つ引きつける磁力のようなものを次の時代にきちんと送って、次の時代にその磁力を受け継いでくれるような人たちを作りたいと思っている。先日、この話を野村特別委員にも話しているのですが、本文中に「学藝府」という言葉が出てきているのは、それを受けてのことと思われる。伝統産業の職人だけでなく、豆腐屋さんや銭湯を営む方々も含めて、京都にしかない磁力である。

京都の喫茶文化と言われる喫茶店のテーブルにおける会話のようなものも、京都でしか味わえないものがあると思っている。それが京都ファンにつながっている部分もあるので、いわゆる高尚な芸術家やサイエンティスト、アントレプレナーだけでなく、京都ならではの空気、その場の磁力みたいなことも含めて、次の時代にどう伝えていくかということが、私の考える0.1市民である。京都ファンは世の中にはたくさんいる。京都市の人口は144万人を何とか維持したいと思うが、仮にその政策目標が達成できなかったとしても、2000万人いる京都ファンが2500万人になる。あるいは、2500万人の京都愛がもっと深いものになれば、私はこのまちが廃れることはないと思う。そういった人たちが必ず京都の素晴らしいものを受け継いでくれる予備軍になっているし、全員に住んでもらわなくても良い。京都の具体的な何かに対する愛情を持っている人たちの鎖が、次の鎖につながっていくようなまちの在り方とは何か。それをつなげるような装置とは何かということについては、行政が政策的に考えなければならない。

皆さんには長期ビジョンを具体化するためのキーワードを出してもらいたい。あるいは、キーワードはある程度文章にしていけるので、キーワードをどう受け止めるか。この文章が完成した時、あるいは素案ができた時に、誰と対話をして話題にしてもらおうか。場合によっては批判してもらっても構わない。市長や市職員がいないところで、長期ビジョンが話題になり、「これに書いていることと今の政策は逆方向を向いているのではないか」、「これはこういう風に深掘りした方がいいのではないか」という会話があちらこちらでなされることが京都の将来の可能性だと思う。そのボールを投げかけて、余白を持って受け止めて、それをフィードバックしてもらおう。そのやり取りが何百回、何千回と行われたら、京都のまちは大丈夫だと思う。その材料として、どのようなものがあればいいかということを議論していただきたい。それが私の思いである。よろしくお願いします。

司会

それでは、長期ビジョンを読んで感じられたことなどをそれぞれ共有していきたい。

大井委員

私は結びから読んで、課題が多かったり、課題なのか問いかけなのかわからない部分もあったりしたが、あえて投げかける形式にした理由を聞いて納得した。また、文章全体の構造や使われている言葉が難しいと思った。行政計画ということで、そもそも市民の方に

受け入れられにくい傾向があると思うが、その中でも難しい部類なのではないかと感じた。

一方で、第四章第三節に出てくる、『夢中』と『感動』に溢れ」という言葉にわくわくした。仕事で、ソーシャルイノベーションという社会的企業の方々と関わる中で、人と人、企業と企業のつながりがあってこそ成立していると感じることが多々ある。そういった部分は京都の特徴であり、ビジョンに書かれていることとも近いと思う。

余白については、ビジョンを読んでも感じられると思う反面、その余白だけでは感じ取れない難しい部分もあったので、皆さんの考えや感想も聞いて、理解を深めたい。現行基本構想と読み比べたが、哲学的で、市民の方も難しいと感じて、伝えたいメッセージを受け取ってもらえるのかと考えていた。

仲田委員

市長の喫茶文化に関する記事を読んだ時に、「コーヒーが飲みたくなるな」という目に見えない感覚を大切にする感じが、まさに心の余裕があるという余白なのではないかと思った。京都にとって長期ビジョンがどのような意味を持つのかと考えた時に、人によってそれぞれの意味があって良いということも含めた余白であるとする、このように受け取ってほしいという作り手や、これまで議論をしてきた思いはあれども、どのようにして京都愛を持って、京都市民として行動していくのかは、それぞれのやり方があって良いと思う。長期ビジョンがきちんと伝わることも大事だが、むしろ、この長期ビジョンの取扱説明書のようなものがある方が、作り手、読み手にとっての余白が生まれていいのではないかな。

難しいと感じる方、難しくないと感じる方、こちらのほうが面白いと感じる方がいるなど、それぞれの解釈があると良い。初めから京都に本物があったのではなく、この京都がいろいろなものを面白がってほんまもんにしてきたというのが、先人たちの歴史をたどった時に感じたことである。そういった長期ビジョンの様々な読み方や使い方を指し示すことが、共有という名の使い方の指南ではないかと思った。

大井委員

私もそのように思う。企業のビジョン策定やブランディングに関わることあるのだが、その中で大事なことは、自分なりに解釈して行動できるかということである。それが余白のある読み方、使い方なのではないかと思う。

都地委員

私は全体を読んで、長期ビジョンの文章の中には人格性が感じられた。様々なビジョンの中で、自らの自慢できる部分を出すところが多いと思う。しかし、過去を顧みて、反省し、素直に受け入れる部分や、現状でこのような課題があるかもしれないが、こういったことに対する期待があるという部分を書くことが重要だと思う。やはりビジョンなので、次にどう生きるかという部分が書かれていることも非常に大事なことだと思っている。

個人的には、この文章に非常に満足しているが、そう思わない人も必ずいる。万人に受けるためのものではないが、誰しも憧れの人がいるように、ビジョンが人格性を持って、

憧れのようなものになるのであれば、その憧れの下に人は集うはずなので、そういった意味でもこのビジョンは非常に良いと思う。解釈が分かれても良いし、全体像を読めないとか、理解できないという意見があっても良い。ただ、少しでも理解できる人が、どのように言語ではない形で関係性を持ちながら伝えていくかということが非常に重要である。

京都の特徴は、狭い環境の中で人と人との有機的なつながりから新しいものが生まれるところにある。カフェの中などもそうだが、ただ広いわけではなく、狭い環境だからこそ有機的な関係性を構築することができる。このまちの特徴と密度を精一杯活かして、それぞれがビジョンを理解していく中でどのようにして伝えていくか、どのようにして体現していくかということが、これから大事になってくるのではないかと思う。

私は、スタートアップのエコシステムを作ることや、アカデミックなものを社会実装するためのサポートなどの仕事をしている。アカデミアの中の人たちを見ていると、自分の技術を社会実装するために、童心に返ったかのように目を輝かせて、無邪気に研究しているが、それができるような環境が京都の中にあるということだと思う。京都の特徴である有機的なつながりが、アカデミアの中にも入ってくると、今まで実装できなかったことができるようになっていくのではないか。例えば医学において、社会学の観点が入ってくることによって気づくものがあるかもしれない。長期ビジョンの策定に関わる中で、どのようにして有機的なつながりをこの京都の中で生み出していくことができるかということについて、自分の仕事を見つめ直す機会にもなった。

今までのスタートアップエコシステムは、中心となるような人物を介して、関係者がやりとりしていた。ただ、そうではなくて京都という環境の中で、それぞれが役割を持って、有機的にそれぞれの役割を自認して活動できるような環境を作っていくことができれば良いと、このビジョンを見て感じた。

田口委員

読んだ感想としては、挑戦的な内容が多く記載されていると感じている。例えば、経済や、自然と人間に関する部分は、非常にラジカルなことが書かれており、こんなことも書けるのだなと前向きに捉えている。以前の未来共創チーム会議の議論の中で、地図ではなく、コンパスがあった方が良いという話があったと思うが、実際に読んでみて、地図というよりコンパスという感じなのではないかと思った。第四章に、非常に多彩な視点が含まれており、未来共創チーム会議で議論したことや、推測だが野村特別委員の思いの強い部分などが見え隠れしており、それ自体が多面的で良いと思う。その上で、ビジョンにはこう書いているが、僕らはこう考えてもいいのではないかという議論が起きることを期待したい。

司会

ラジカルだと感じたのは、人間の営為と自然とを調和させていくという部分か。

田口委員

自然と人間の調和は、普通と言えば普通の言い回しだと思うが、不可分性という話は、おそらくもう一歩先に進んでいる。経済合理性に対しては見る人にとってはどうなのかと思うようなところをあえて言及しているが、経済そのものを否定するというよりは、経済と人の京都らしいつながりのようなものを一緒に考えていくことができるのではないかという、勇気のある記載なので、そういったところがラジカルだと思った。

大竹委員

全体を通して、未来共創チーム会議の議論がきちんと織り込まれており、言ってみるものだなと思った。体裁だけでなく、内容としてきちんと織り込まれているのでよかった。0. 1 市民という言葉を使わずに、その価値観を盛り込むとこのような表現になるのだなと新たな発見があった。一方で、文章の中で、自然や文化という言葉が多く出てきたが、言葉の使い方や捉え方にばらつきがあるように感じた。

文章全体に人格を感じつつ、はっきりしていないと感じる部分や、矛盾を感じる部分も多かった。最初は、全体的にはまとまりはあるが、細かく見るとずれがあるなど違和感があった。しかし、徐々にそれはそれで良いのではないかと思うようになった。ビジョンとして良い文章とは何かと考えた時に、やはり解釈の余地があり、様々な議論が生まれるものが良いだろうと思ったからである。

第四章にある私たちが目指すものというのが、大きく分けて、自然のこと、文化のこと、自他との関係性のことの3つであるというところに京都らしさを感じた。そこに経済が入ってこないことが、京都らしい。

田口委員

確かに、経済のことは事実として触れられているのであって、心の拠り所としているわけではないという感じがした。

伊住委員

都地委員と大竹委員が文章そのものに人格性を感じるとおっしゃっていたが、一つ一つの文章の作り方にエネルギーを感じる文章になっているというのが全体を通して見解である。そこにきちんと力のある文章になっているという感覚は持っており、その意味では、個人的に満足している。

かなり踏み込んでメッセージを伝えている部分が多く含まれているという印象を受けた。この単語を残すのかどうかという議論はあると思うが、「学藝衆」という言葉も、一般的には学問と芸術を指すが、この文章においては、それらに限定されない様々な人間的営為を含んでいる。別の新しい概念のようなものだとするなら、考え方は素敵だが、それを「京都学藝衆」と呼ぶという考え方も含めて、説明が少し足りないのかもしれない。「学藝」という言葉を用いると、どうしても学問と芸術を連想するので、その他にも喫茶文化や、京都に根付いているアンダーグラウンドなカルチャーなどに携わっている方々を含めて、こ

ういった言い回しでそれをきちんと定義していくという強いメッセージがあるのであれば、この方向で良いのではないかと思った。併せて、「この概念はこういったことである」という付属する解説があってもいいのかもしれない。

「心の御土居」という単語が出てきたが、私は初めて聞いた言葉で、使われる方と使われない方がいる単語なのではないかと思った。ただ、一般的に言われる「洛中・洛外」など、何かしらの境界のようなものをあえて単語として使い、そういったものを私たちはこれからきちんと取り除いていくのだという強いメッセージがあるという意味では、共感できるポイントであり、踏み込んだメッセージで、素敵だと思う。

先ほど市長がお話しになった磁力をどう伝えていくのかというのは、非常に良い問いかけだと私は思った。それに関連して言うと、ここでは市民が主体になっているので、人がベースになっていると思う。よって、「学藝衆」という人物主体の動きが当然あるわけだが、私が思う継承の文脈の中に入ってくる主体や主役とは、「人」と「場」と「もの」の3つである。要するに、ものを継承する時には、受け継がれていくストーリーがあり、お寺や神社などの場所を継承していく、血脈ではない何かの文脈があって、儀式的なものによって受け継がれていく。一方で、お茶であれば家元のご流儀などの中で受け継がれていく文脈もある。儀式やお祭りなどの中で受け継がれていくきっかけがそこにあると思う。そういった人主体のものとは別の頭の使い方であり、場や継承されてきたもの、お茶であれば茶道具だが、そのようなものを通して、京都というまちで、文化がバトンリレーされてきたのだという部分は、もう少し考える要素があるかもしれない。当然長期ビジョンは京都市民主体の話なので、磁力という言葉をいただいて、これから伝えていくに当たってはその3点が必要な考え方になってくると思ったので、併せてお伝えした。

生活者としての視点で見ると、もともと子育てしにくいというイメージを持っていたが、実際は子育てにかなり力を入れており、しっかりサポートしていただいていると感じている。しかし、実際に経験したり、その情報に辿りついたりする前に、このまちで子育てしたいと思うかと言うと、ハードルが高いように感じる。そのため、実際に子育てが始まる前に転居してしまうパターンが多いのかと思う。そういった意味では、時間がかかるかもしれないが、子育てをする前の世代に、そのような情報をリーチすることが重要である。

池坊委員

皆さんがおっしゃるように、我々の議論も数多く拾っていただいているし、フタバアオイや地域猫、町内会という単語が出てくる点では、市民の皆さんの共感を得やすく、完成度は非常に高いのではないかと思う。その一方で、第三章あるいは第五章、結びの折々で、現在の京都、日本、あるいは世界の様々な課題が指摘されており、なかなか読み進めるのがつらく、これを京都市民で解決していこうというモチベーションに転嫁するには、目の前の課題が大き過ぎてギャップがあるのではないかとも思う。

この文章には余白もあり、そういった意味では解釈の余地もあるということは分かるが、解釈をしていくにも、その土壌が必要となる。今お米のことで大騒動が起こっているが、お米のことにどちらの立場からどのような発言をしても、揚げ足を取られて炎上するよう

に、今や分断が進んでいるから、余白をお互いに解釈するだけの余力がないというところに対してどうかと思うところもある。

第五章の途中からは、市長がおっしゃるように、呼びかけがたくさん投げられている。その部分を読んだ時はケネディ元大統領の演説を彷彿させるような文章だと思った。当時も組織や国、人々のために国民にどのようなことができるか、協力してほしいという呼びかけで人々の心をつかんだ。今、同じことを単純にしたとしても、それが人々の心に即座に届き、このビジョンの実現に向けて行動するように促せるかという、まだ少しのギャップがあると私は考えている。

その意味でも、まずは現状をもう少し肯定していくことが必要ではないか。もちろん行政や市民の暮らしぶりにもいろいろな苦しさや欠落があり、課題が非常に多いことは分かる。今、ビジョンや京都市の全体、日本の全体について関心を向ける余裕のない人が大多数だと思う。そういった人たちの一人一人が、日々暮らしをして、仕事をして、ものづくりをして、そういったことに従事しながら毎日を暮らしていく中で、あなたが今ここにいることが、先ほど鎖の輪という話も出てきたが、1200年前から続く長い歴史の人々の関わり合いの鎖の一つをきちんと成しているという、現状を肯定するような土壌を拾い上げる部分がもう少しあると良いのではないかなと思う。いきなり課題を与えられ、解決してほしいと言われても、なかなか理解はできないのではないだろうか。しかし、あなたがここにいて、普通に仕事をして、当たり前で暮らしていることが京都の価値あるピースの1つになっているのだというところから、その上で未来をどうするべきか、このように行動ができるのではないかなというように歩みを進めることもできるのではないかなと思った。第三章や第五章の途中から、事実ではあるが、重い課題を突き付けられているような圧を強く感じてしまうかもしれない。

実践の面においても、そのような視点を入れる余地があると思う。日々暮らしていて、京都全体の課題を解決しようと思える人はなかなかいないと思う。我々が花を生ける時には、はさみや竹のおとし、花入れ、畳も必要である。御簾が掛かっていたり、組紐があったり、そういった花を生産する人がいたり、実に無数の網の目の上で花を生ける行為が成り立っているが、それになかなか気づけない。それをきちんと自覚して、そういったプロセスや、そこの先に人がいることに気づくことも大きなことだと思う。職場と自宅のみに視野が狭まってしまうことも多い。まずは自分自身の価値や、自分自身がどのような網の目の中に存在しているのかということについて考え、自分に光を当てる。そこから京都を知ることが大切ではないかなと思う。

松井市長

前回の審議会では、委員の皆さんから多くの根源的な問いかけがあったのだが、その1つに、これは総合計画なのかという問いかけがあった。それに対して、今後25年間の計画を書くつもりはなく、2025年時点の総合計画審議会の方々が合意した、我々が大切にすべき京都のまちの在り方を示す構想にしたいと思い、諮問したと私は答えた。

伊住委員から子育ての話が出たが、長期ビジョンは政策メニューを並べる場所ではなく、

こういった価値を大切にすべきというビジョンを受けて、行政がもう少し短期の政策を考えていくべきものであると考える。京都学藝衆というのは、政策メニューの話であるが、政策メニューと理念は私の中では1つになっている。それは伊住委員がおっしゃるように、人であり、場であり、常連文化のようなものである。そういったものに体化されている磁力を我々がどのように受け取るかが重要である。その磁力を強化する、あるいは衰えさせずに、次につないでいくための政策を考えなければならない。その政策について京都市が何を考えているのかということを皆さんに理解していただいた上で、どのような価値や構想が必要かということを行ったり来たりしながら議論することが大事だと思っている。

もう1つは、学校という場をもう一度活用できないかと思っている。実際に経験したうえで言うと、受験勉強に多くの時間を費やすことはやめた方が良く心の底から思う。受験勉強のすべてを否定するわけではないが、それでは問題解決力は向上しない。京都の子どもたちがそれにお金や時間を費やしているのはもったいない。進学塾に行くのも自由だが、私が学藝衆と呼ぶような方々に出会う場をもっと提供したいという思いがある。京都というまちには、そういった人たちが住んでいるのに、大学生にしても、高校生にしても、中学生にしても、小学生にしても、全く交わっていない。職人や芸術家だけではなく、銭湯や喫茶店でも良いので、今言ったような京都を京都たらしめているような磁力のある人たちと、もっと会う場を提供したい。その場として、放課後の学校を使いたい。

京都は、番組小学校がコミュニティ・スクールになり、様々な成果を上げてきた。次のステップとして、子どもたちがまちの郷土史を知っている方々の話を聞ける場を学校に作りたい。それにもっと多くの人たちが関わってほしい。東京の三鷹市というところは、地域のいろいろな学習活動の場として、学校を提供する取組を始めている。三鷹と京都はコミュニティ・スクールの二大拠点である。京都は番組小学校の歴史があるから、コミュニティ・スクールがこれだけ発展した。全国のコミュニティ・スクール協議会の会長は、京都市の教育長が務めている。

大竹委員

伝統は磁力のある人たちだけいけば成り立つものではなく、その価値を認識できるだけの感受性や教養、精神性を一般市民が持っていたからだと思う。しかし、最近の学校教育の中では、そういった力を育むような機会はなかったと思う。そういった力はすぐに身につくものではないので、小学校など早い段階から始めるのが良いと思う。

松井市長

私は、世の中が教育無償化に躍起になっていることに対して思うところがある。無償化は垣根を低くすることなので、価値のあることではあるが、それよりもその中身をどうするかの方が重要ではないだろうか。大学で10年間教えてきた中で、多くの学生は大学とアルバイト先にしか行かず、特に京都は、数多くのほんまもんが身近にあるまちなのに、それらに接していない。一方、磁力を持っている人たちも、最近の若者には理解してもらえないと思っている。それなら、そこをつなぎ合わせることで行政の役割なのではないか

と思う。学校を使って、子どもに接点を提供すると親も一緒に学び直しができる。

先ほど鎖の話をしたが、それを次の世代にどのようにつながってもらえるかということである。ビジョンをどのように浸透させるかということにもつながるが、策定に関わった人たちは数十人しかいない。策定の経過を知っている皆さんに語り部になってもらい、さらに語り部を増やしていってほしい。

（２） 長期ビジョン（仮称）の浸透に係る議論

司会

長期ビジョンの浸透に係る議論に入る前に、本文について、他に発言しておきたいことがある方はおられるか。

大竹委員

1つだけ付け加えたいことがある。多くの人は、日々の生活に精一杯で、自分がこのまちを作っているという感覚を持っていない。そういった感覚がなければ、例えば、今実際にお米の価格が高くなった時に、備蓄米を放出してほしいとは言いが、自分でお米を作ろうという発想にはならない。問題が発生した時には、行政や他の誰かのせいにしたくなってしまう。

私が普段活動している洛西地域では、住民がこれまで地下鉄延伸を要望してきたが、このような状況になっている原因は行政にあるという感覚を持っているからだと思う。地域の年配の方が製作している、今年で10年目を迎えた通信の昔の記事には、地下鉄を作してほしいという趣旨の内容が多かったが、最近の記事には、暮らしやすくて、若者が住みたいと思うまちにしていきたいと書いてあった。「していきたい」という主体性を持った言葉が使われていたことが印象的であった。私も暮らす中で実感するまちの変化である。

行政に何とかしてもらいたい、解決してもらえないかもしれないという不安感、危機感があるように思うが、一方で、自分たちが主体的に行動できるチャンスではないかとも思っている。私自身も、高くて買えないのであれば、自分で作ってみようと思い、最近になって畑を始めている。

この長期ビジョンについても、あくまでも文章であり、拠り所になるかもしれないが、解決してくれる何かではないという位置づけに思ってもらえるようにしたい。現行基本構想においても、「私たち市民は」という主語にすることで、市民の主体性を引き出してきたが、それ以外の工夫も必要ではないか。

司会

結びの部分に、市民に問いかける表現が使われているが、そのような狙いも少し垣間見えたのではないかと思います。

続いて、後半では、長期ビジョンをどのようにして浸透させていくか。そもそも浸透とは何かという議論をしていきたい。まずは、事務局から案を説明していただく。

荒木都市経営戦略室長

(資料に基づき説明)

司会

事務局からの説明について、御意見等ある方はおられるか。

田口委員

事務局案では、「知る、感じる」、「共感する」、「行動する」という3つの段階があると定義しているが、その中で最も重要なことは行動が変わることではないかと思った時に、本当にこの順番で進んでいくのかという点に違和感がある。知らなかったところから、知って、共感して、ここを変えようというよりは、もっと異なる順番になるのではないか。知ることも浸透だと言えると思うが、あまりそれに引っ張られるよりは、行動が変わることを浸透だと考えて議論した方が良いのではないか。

また、ポッドキャストやワークショップなどは、行動を変える手法としてあると思う。例えば、TikTok や Instagram など、どのようなチャンネルを活用しようという議論を先に行わずに、3時間の動画を作ってからどうやって広げようと議論するのはあまり意味がない。どのような媒体で伝えるのかによって、伝えたい内容や変えたい行動が明確になると思う。

仲田委員

私は、ビジョンのために市民がいるわけではないということを、大事にした方がいいと思った。行動してもらうためにはどうすべきかを考えると、市民をビジョンの実行部隊として捉えてしまいやすくなるので、そこは気を付けるべき。そうではなく、市民の暮らしが25年先もこうあってほしいと思うためのビジョンだと思うので、行動変容を起こすためにどうしようかという議論になると、行動させることが目的化してしまいそうである。その部分だけ気を付けて進行できると良いと思う。行動してもらおうという思考になると、この先ビジョンを実行するための議論になってしまう危うさがあるのではないかと思った。

田口委員

行動変容というのは、これをやらしてもらおうというよりは、それ自体を楽しんでもらうというものも含むと思う。何かを好きになってもらおうというのは、知って、共感して、行動が同時に起きるというイメージである。

伊住委員

私も、理解してから行動に移すという順序だけではないと思っている。お茶のお稽古では、型から学んでいき、後から理解が追い付いてくることがある。他にも、私の知人に、街中でお地蔵さんがあったら絶対に手を合わせてお辞儀をしていく方がいる。そういった行動の中にも京都に対する何かがあるわけで、行動から始まる理解のようなものがあると

思う。

行動変容を意識しすぎると、仲田委員が指摘されたように、どうすればこういった行動をしてもらえるかといった議論になりやすいので、注意が必要である。

松井市長

3つの段階が順序どおり、一方向に進んでいくような図の書き方が、やはり気になるだろう。大前提として、当然のことながら反発する人もいる。行動というのは、実際には、思ったような行動と全く異なる行動が広がっていくものである。反発し、別ベクトルの行動が行われるかもしれない。しかし、それも含めて、長期ビジョンを材料にさせていただくだけでも良いと思っている。

行政がつくるビジョンに課題と解決策を示し、皆さんを護送船団でそちらへ導くというのは従来の手法で、多くの場合は失敗する。しかし、そういった議論の結果、化学反応が起こり、実は意外に変なものが生まれたりする。事務局が示した図に対するアンチテーゼがあったということを記録してほしい。

司会

これまでの話を聞くと、バラバラに存在しながら、その時々によってつながっていくような形が思い浮かんでいるが、皆さんのイメージは合っているか。

仲田委員

合っていると思う。

松井市長

武道家の人は、例えば剣道でも素振りから入る。素振りの意味を理解して、共感して素振りをしているかということそうではない。

司会

過去の議論を振り返ると、冊子をつくったり、いろいろな言語や関西弁に翻訳してみたりするというアイデアも出てきた。型から入るということに近いかもしれないが、お茶やお花の体験イベントをやってみるなど、言葉以外の伝え方に関する意見も出ていた。

田口委員

まずは、先ほどの浸透について、もっと共有した方が良いのではないかな。知ってもらい、共感してもらおうというのは抽象的で、ビジョンで書かれている状態が目的だと思う。このように人があったらいいなという話で、それはやはりどんなに些細であれ行動の中に表れるものだと思う。行動変容という言い方は難しいが、そこが目的だと私は思っていて、京都市民がこのようなものを楽しんでいるとか、このような人たちとこのようなことをしているみたいなことが目的だと考えた時に、なぜお茶なのかということが明確でないと、何

がアウトプットとして良いかという話にならない気がする。例えばお花やお茶の体験をすると伝統産業のようなものに裾野が広がって、行動が変わる人がいるかもしれないという議論も良いと思うが。

司会

行動変容と書いたが、行動は変容しなくても良いような気がしていて、日々の行動や、自分の経済活動や文化的な活動が肯定されることで、後押しされていると感じ、それを続けていくことも行動の一部ではないかと感じたが、皆さんはいかがか。

都地委員

私は時間軸が関係していると思う。例えば、これからスタートアップで連携していこうというビジョンの話になると、その長期ビジョンを知っている側としては、こういった形で進めていけたら良いという提案はできると思う。しかし、実際に既にあったものなどに対しては、捉え方がまた変わってくる。「これってこういう魅力があるよね」「そういえばこういうところに書いてあるよね」など、アプローチの仕方というのは時間軸でも変わってくるのではないかという気がした。

大井委員

浸透のステップとして、必ずしも共感ばかりではないという認識で良いのか。知ってもらった後、共感せず疑問を持って、行動に移されることもあると思ったのだが、そういう理解でよいのか。

司会

そういったルートで行動に移すことも考えられる。共感し合って、疑問が生まれることも1つの反応である。

大竹委員

確かに、ビジョンを知ってもらって、どういった反応が出るのかをイメージするのは難しい。それも踏まえて余白だと思うので、何となくこのような状態だということをここで共有することができても、全てを列挙できるわけではない。

松井市長

先ほど田口委員が言ったことは、行政職員としては当然である。こういったビジョンを行政として皆さんを巻き込んで作ったわけだから、一人でも多くの人たちに知ってもらって、考えてもらいたい。そして結果として、例えば職人と出会って、その道を継いだり、あるいはそれをアレンジしたりしようという人たちが出てきてくれると私たちとしては面白い。

しかし、浸透のプロセスを決めつけてしまい、このために浸透プロセスを実施するとい

うと、反発する人たちが出てくるから、そういった反発も含めて、どのように見せていくのかはまた違う。行政の真意としては、せっかくここまでやったのだから知ってもらいたいし、そのことによって市民の中で何らかの化学反応が起こってほしいし、後継者も生まれてほしいという思いは当然ある。

例えば、池坊委員がされているような写真集を作り、「このような現場を一回見てみませんか」というところから入り、実は我々はこういったビジョンを作っているが、そこに書いてあることは、「このようなものを見てほしかったのです」「体験してほしかったのです」というところから入ってもらうなど、様々な入口が用意されている方がいい。行政としてはこれだけのものを作ったのだから、こういった道筋をたどってほしいと思うが、ビジョンを最初から読む人ばかりでなくても良い。

全員が同じように要約版を用いて解説していくのではなく、それぞれがビジョンの中で自分の心が動いた一節について語る会を実施する方が良い。絵で表現する人がいても良いし、場所についても、例えば道場など様々なところで実施するのも面白い。その方が、ビジョンや、行政の取組に反発している人に対しても訴求でき、考えてもらうことができる。無関心よりも反発される方が良いと思う。

仲田委員

要は、こういったリアクションを生み出したいのかということだと思う。浸透という言葉も1つのリアクションとして捉えた時に、このメンバーが語り部として、こういったリアクションを生み出したいというアイデアが生まれたのかということが議論のポイントではないかと思った。

司会

ということは、それぞれがイメージできるリアクションを持っていれば良いということか。

仲田委員

それがそれぞれの「知る」とか、「共感」とか、「行動」になるのではないだろうか。

田口委員

おそらく「浸透」という単語が先に来ってしまったから、行動してもらうことが伴わなければならないってしまったが、浸透を目指すのは行政的な意見だと思うので、市民が浸透してほしいかどうかは別の問題である。

松井市長

「浸透」という言葉にベクトルがある。プロパガンダのようなイメージを持って捉えてしまう人が多いから、言葉の使い方に気を付けた方がいい。

田口委員

「浸透」というよりは、「反応」や「感染」のようなイメージかもしれない。

松井市長

知ってもらおうとか、感じてもらうのはいいが、「浸透」と言ってしまうと、この水の流れを受け止めてほしいという感じになる。

大竹委員

スタートラインをどこに設定するのか。

司会

そういった意味では、知ってもらおう、感じてもらうことに特化して議論しても良いのではないか。どのような反応が生まれるかは受け手次第で、どのように解釈されるかも余白を持ってお渡しするということである。

松井市長

反発する人もいれば、共感する人もいれば、感動してくれて、それが伝播することもあるれば、様々である。それでこそ総合計画ということかもしれない。

司会

存在を知るぐらいで良いが、もっと関心を持って、ちょっと嫌だなとか、好きだなというところも含めて感じてもらうために、皆さんができること、もしくはみんなでやった方が良いことは何かという問いかけだとアイデアが出るかもしれない。

池坊委員

お花を教えていると、お花の名前は何かとよく聞かれる。お花の名前は無限にあるので、全てを知っているわけではなく、知る必要もない。名前を知ったからといって花を知ったことにはならない。触ったり、お世話をしたり、たまに好き過ぎて食べる人もいるが、そういったことをしていくと、よく知ることにつながっていくと思う。共感とは違うと思うが、触れるとか、感じるというのが、私たちが提供できる土壌ではないかと思う。

「京都」というのも、本当に議論したい。多面的でいろいろな切り口があるから、写真集でいろいろな工房を巡っても、お華やお茶を体験しても、あるいはポッドキャストで何かを流しても、市民にとっては、自分にとっては異物との出会いになると思う。自分の中にはなかったような考え、あるいは体験。その異物の京都の一側面と触れ合って、それが反発したり、あるいは感動したり、あるいは関心が向いたりするのか分からないが、その異物の中から京都の理解を深めていくような出会いを提供することになるのではないかと思った。

田口委員

行動という言葉は難しいが、行動してもらおうというのは池坊委員がおっしゃったような意味で思えば良いのではないかなと思う。プロパガンダのように捉えられてしまうという懸念はあるが、スタートをデザインするという、今いる場所から違うところに一步踏み出して、こちらに向かって行ってほしいというくらいのメッセージは必要である。それは必ずしも、何か自分の目的のために人を動員する話とは限らない。人が行動を変えるためには、きっかけや言い訳が必要である。それがスタートをデザインするという話で、他にもそういったものがあるのではないかなと思う。

その次に、知ってもらうことに固執してしまうと、何枚ビラを配ったかというような数値目標の話になってしまうが、それは避けたい。そうではなく、どれだけの人がこのビジョンに近い領域に一步進んだかというようなものを目指すべきではないか。

都地委員

先ほど、私が人格性の話をした手前、長期ビジョンをどうやっていろいろな人に紹介しようかという方向でいろいろ考えていた。おそらく行動の部分は、憧れがあるからこの人の動き方をしたいとか、まねしたいということも生まれてくるものだと思う。やはり知ってもらう、紹介する時というのが大事だと思う。

司会

先ほどの休憩時間は、フランクな雰囲気アイデアが膨らんでいたように思うので、5分間、2人ずつ個別に話し合う時間を設けたいと思う。

－ 5分間個別対話 －

司会

どういった話をしていたか、共有していただきたい。

伊住委員

アイデアの多くは大竹委員から出していただいたが、話を聞いて私が素晴らしいと思った視点が2つある。1つは、アスタリスク・イン・レジデンスという取組を例に挙げただいた。京都の中の人、中の人に向けて発信するだけでなく、京都の外側にいる人たちを巻き込み、外側から内側に向けたコメントを理解してもらった上で、反応を返してもらうプラットフォームのようなものを作り、小さいながらも少しずつ積み重ねていくことで、広がりが出てくるのではないかなと思う。

併せて、大竹委員自身の体験からいろいろ話していただいた中で出てきたキーワードが、自分自身の日常と結び付かないということだった。この辺りは大竹委員に補足していただきたいと思うが、私自身の体験談としても、自分の生活圏内にメッセージが入ってこない、どうしても異物のように捉えてしまい、自分の生活の中に入っていない。例えば子

どもたち向けのイベントをしようとなった時に、小さい子たちはお昼過ぎぐらいから昼寝をするから、親の立場としては子どもを連れて行きづらい。場所の問題もある。そうなった時に、どれほど良いイベントをしても、親は連れて行けなくなってしまうことがある。伝えたい、どういったリアクションを求めているのかという、壁打ちする相手、層がどのような対象なのかということを経験しながら、そういった人たちの生活層に届けていくためにはどのようなことが良いのかということを経験した方が良いという話をしていった。

大竹委員

例えば、年配の方であれば、新聞を読む人が多いので、新聞に挟み込んでも良いだろう。私が最近乗った電車には、前の座席の背面に二次元コードが貼られており、読み込んでみると、京都府の取組を紹介するサイトであった。二次元コードは全座席に貼られていたが、座席によって紹介されるページが異なっていた。それによって、隣に座った人とも会話が生まれ、取組についても知ることができたので、日常の動線にあるということが重要なのではないかと思った。以前の会議で出てきた、公園の遊具にビジョンのキーワードを貼るというアイデアに近いかもしれない。いくつかは英語で書いてあっても面白い。

伊住委員

本当に生活している圏内とはどこかということを経験を、きちんと考えるということかもしれない。

都地委員

私のところでは、伝える年齢層によって、内容や手法が変わってくるという話をしていった。例えば、小学生やこれから産まれてくる子どもたちに対しては、将来につなげるために投資的なアプローチも必要になるのではないかな。

他には、押し付けるような形ではないというなら、どのようなやり方があるのかという話もした。ジャストアイデアだが、映画のようなものを作っても良いのではないかな。万博に行かれた体験談を聞きながら、映像体験を通して伝える方法もあると思ったが、それもプロパガンダと紙一重という話も出ていた。

浸透させるという意味での難しさを感じている一方で、私がスタートアップとして動いていた時や、現在スタートアップの方を支援する仕事をさせていただいている中で感じるのは、東京モデルと京都モデルで経済的活動が全く異なるということである。京都はどちらかというと、人と人とのつながりで何が出来るかということに焦点が当てられているケースが多いので、人と人とが一緒に共創して作り出すところの心地良さが京都の美学だと感じていた。例えば東京から進出される方々に対して、京都というのは、ただ個人で成功したら良いということではなく、みんなでいろいろな喜びや利益を享受する文化であることを、長期ビジョンの形で示していくことができると、なぜ自分たちがうまくいかなかったのかということと、相対比較をするきっかけにもなり得ると思った。その気づきとして、

長期ビジョンというのは有効的に作用するのではないか。

そういった人と人とのつながりの中で、自分の専門外のところから仕事の話が来たりする。そのようなところのつながりがあって、いろいろやってみたら面白いことになったというのを京都ではよく見る。割と人とのつながりが非常に大事だったりする。東京で働いていると意外に気づけなかったことでもあるので、そういったところで長期ビジョンを見てみると、こういうことかという、引用の元になったら良いと思った。

田口委員

都地委員とは、憧れみたいなものが大事だという話もしていた。この人にこういう行動をしてもらうという話と、師匠が背中中で引っ張って、弟子にこういうことをさせるという話と通じる部分があると思う。リスペクトや憧れは属人的だったりする。今ならファンカルチャーや推しという言葉もあるが、商業の世界でできるなら、文化や芸術など日常の中でもっとできるような気がするし、京都に強みがあるように思う。どの部分を強く押していけば良いのか分からないが。

大井委員

休憩時間の間に、池坊委員から、東京でハリーポッターとコラボした生け花展示をされたお話を伺った。そこから着想を得て、長期ビジョンと京都の文化をコラボさせて知ってもらうというのは、長期ビジョンを知ってもらう入口として良いのではないかという話をしていて。京都ならではのものを掛け合わせるとしたら何が良いのかと考えるのも面白いと思う。

仲田委員からは「五感」というキーワードを出していただいた。ビジョンをテーマに何かを見たり、聞いたりするというのは想像できると思うが、嗅ぐとなると、何をどう嗅いでもらうと良いだろうかと話していた。25年先が想像できるようなお香を作られるだろうか。味覚で感じてもらうとすれば、ビジョンを読んでもらった後に、ビジョンをテーマにしたフルコースを提供しても面白いのではないかという話をしていて。

最後に、仲田委員から、「X with ビジョン」の話をしていただきたい。

仲田委員

ハリーポッターや五感、スタートアップの話が出ていたが、長期ビジョンを押し付けるのではなく、そばにあるという感覚に近いのではないかと思い、「X with ビジョン」と題して、X 部分には何が入ってもいいとする。味覚で伝えるのであれば、料理人の方でも良いかもしれないし、「香り with ビジョン」でも良い。何か大事な未来を込めた思いがあるビジョンをそばに置くと、どのような反応が起こるのかということ「X」と置いてやってみても面白いのではないかと思った。何でもいいということと、語り部の皆さんが一人一人の「X with ビジョン」とした時に、何をしたくなるか、何が生まれるのかというのは、今すぐできることだと思った。二次元コードを活用すると、「電柱 with ビジョン」もあり得る。

池坊委員

ハリーポッターとお花について取り上げていただいたが、他にもフィギュアスケーターとお花や、ラッパーとお花など、様々な話がある。一見すると縁がなさそうな、跳躍しているコラボレーションでこそ互いの良さが引き立ち合うと感じる。スパイス一つで変わる、あるいはもっと深く知ることもあると思う。

松井市長とお話をさせていただいた中で、私の考えも補足して話をさせていただく。ここにいる皆さんが語り部であるという話があったが、委託された業務のように、この意をそのまま受けて、ビジョンをそのまま説明するというのではなくて、一人一人がそれぞれのコミュニティ、あるいは長所、短所、フォロワーの皆さんなど、そういったものがあると思う。委員はそうだが、ここに集っていただいている市民の皆さんや、あるいは職員の皆さんも、平均より間違いなく能動性があると思う。よって、それぞれのコミュニティや、お花ならお花など、そういった中においてこの経験の話をして、「だしにして」という言葉が使われていたが、そのようなものを活かしながら、それがまたビジョンの理解に還元されるのではないかと話もしていた。

話は変わるが、私は関東でラジオのパーソナリティーをしていて、長期ビジョンの話を取り上げたこともある。リスナーの方は、長期ビジョンについての理解が少しは深まっているかもしれない。ビジョンに触れるきっかけはそういったものでも良いと思うので、それぞれの持ち味を生かして、浸透というか、行動を起こしていけば良いのではないかと話もしていた。

田口委員

おそらく何を入れてもつながっている文脈という感じが引き出せると思うし、それを見つけないと考えること自体が行動してもらおうとか、浸透という話のような気もする。難しいのは、ビジョンの内容が非常に多岐にわたっていることである。ハリーポッターとお花であれば、ハリーポッターを好きな人は、ハリーポッターを通して、お花を理解するかもしれない。逆も然りである。しかし、ビジョンは一口でくくれるものではないから、そこが難しいと思った。

松井市長

ビジョンのすべてを伝えようとしなくいい。要するに、自分が感じたビジョンを、自分の文脈とオーガニックな言葉で、自分のファンや周りの人に伝えていただくのが一番である。おそらくその部分だけはずっと伝わるはずである。ビジョンのすべてを説明するのは、私がやるべきことで、皆さんは、それぞれ自分のサークルを持っている人たちは、少なくともそのサークルの中で話題にしてもらう。自分のオーガニックな言葉で、自分の専門性や自分のファンの人たちの共通言語の中で、「ここの部分は響いた」とか、「ここの部分は自分が言っている、ここと同じ」ということだけでもしていただきたい。ビジョン全体を論理立てて、15分で説明してくれというのは無理なので、おいしいところ取りが良いと思う。ただ、それぞれのサークルがない人もいるわけで、例えば、学校の先生であれば

こういった説明の仕方があるというように、様々な人に応じた入口をどのように用意するかということは、我々がすべきことである。

しかし、少なくとも皆さんのような語り部になる人たちは、自分の世界の中で、どこの部分がおいしいと思ったか、そのおいしさを伝えていただきたい。先ほどの個別対話において、池坊委員がおっしゃったことは、どれだけ大事なことが書かれてあったとしても、読む気がしないと言われたら意味がないということ。それであれば、自分の文脈の中で語れる魅力的な部分だけを自分なりに伝えた方が良いのではないかという話をしていた。そういったことにこそ意味があると思う。ただ、行政職員はなかなかそういうわけにはいかず、耳障りの良いことばかり言って、課題があるのになぜ課題を伝えないのかと言われてしまう。田口委員と大井委員は行政職員だからといって、ビジョンを全部説明しなければいけないわけではなく、例えば、山歩きが趣味だとすれば、山歩きの仲間たちに対して、「山歩きをしている自分のような人間からすると、ビジョンに書いてある、ここの部分は割と大事だと思う」というように語ってもらえば良いと思う。行政の立場からすると、税金でこのビジョンを作っているのだから、浸透させるとか、行動につなげてもらうという発想自体は持たなければならないが、それぞれの個人は、そういったことは考えずに、自分のオーガニックな形で語っていただきたい。好きな映画を伝える時でも、全部の筋立てを説明するのではなく、あのシーンが好きで泣いたということを、情感を持って伝えた方がその映画を見ようかなという気になるはず。

元々広告代理店に勤務していた佐藤尚之氏という方は、広告代理店的な広報の時代はもう終わったと言っている。要するに自分の友人や、自分のオーガニックな世界や、自分のファンベースの中でしか物事は伝わらず、それ以外のものは、A I に取って代わられるそうである。様々な情報を総合的に収集したい場合は、むしろA I が嗜好に応じてくれる。平田オリザ氏は私と一緒に総理大臣のスピーチを書いた人なので、あなたがビジョンを書くとしたら何かと。「おそらく12の問いと言ってビジョンを提示する」というのが彼である。そういった面白い、違う感性の人たちと話をして、どのような伝え方があるのか、あえて反発するような人たちにどのように読んでもらうのかなどについて考えてみるのも良いかもしれない。反発は非常に重要であり、無視されるより反発された方が、その人に何かを与えたということになる。もしかすると、その人たちはある部分については非常に共感してくれるかもしれない。あまり統御された伝播のルートを考えても、逆に伝播されないような気がする。

大竹委員

広告が意義を失い出してくると、ロコミや誰かが言っていたことというのが強く残っていたり、同世代でも、何かするとなった時には友人の意見が重要だったりする。匿名性が高く、誰が言っているか分からないので、誰かが言っていた何かよりも、知っている人、心を許している人が言っている何かのほうが響く。知人以外でも、考えに共感する人がいて、その人が言っていることは聞こうとなることもある。

コラボレーションする相手が異色であればあるほど、受け手からすると、「こんなことも

やっているのか」「面白いことをやっているな」と思うだろうが、それも良いと思う。ふざけるという意味ではなく、楽しむというか、「これを介して何かをしようとしているのだな」ということが伝わるはずである。そういったチャレンジが生まれていくと楽しいと思う。私自身は長期ビジョンをテーマに卒論を書きたいと思ったこともある。

松井市長

皆さんの活躍の場を今後どのように作っていくかということでもある。時々、自身のサークルやコミュニティの中でミーティングをして、自分のまわりではこういった反発があった、このような反応があったと聞いてもらうのもありがたい。

伊住委員

個人的に特にここを読んでほしいというものを伝えていくのは非常に良いと思う。しかし、各々が思うビジョンの「ここがいい」というものに偏りが出る可能性もある。そこで、特に伝えたい部分を自分の言葉で語ることに加えて、私たち京都市民がめざすまちのすがたが8つあるので、このメンバーで役割分担をして、1つずつ伝え方を考えることで、未来共創チーム会議として、8つのめざすまちのすがたのすべてを漏れなく伝えることができるようにしても良いのではないかな。

松井市長

組織的には非常に重要だと思う。知恵を出し合っても良いし、シェアしても良い。自分が感じたネタを共有していただいて、また自分の言葉で伝えていただけると良い。

伊住委員

それぞれに強いメッセージがしっかりと載っているので、全部拾いあげて、それぞれに翻訳し直して伝えていく作業をしても良いと思う。

松井市長

行政としては非常にありがたい。このビジョンには、ある種、執筆者である野村特別委員の人格がいるわけで、例えば8つのめざすまちのすがたについて、皆さんが語り部として、こういった言い方の方が伝わりやすいのではないかなというものがあれば、それは別バージョンのビジョンになり得る。

伊住委員

自分なりの言葉で伝えることで、別の人格が文章に表れて、膨らんでいくというようなことをここで作れると、さらに別の広がりが出てくるのではないかなと思う。

大竹委員

市民にどのように伝えるべきかと考えていたが、どうしても市民の抽象度が高く、イメ

ージしづらい部分があるので、具体的にこの人に対してという形で、手紙のように伝えるのも良いのではないかと。その方がリアリティをもって伝えられる。広く市民に対して伝えるとなると、きちんと、きれいに伝えなければいけないと思ってしまいが、もう少し身近な誰かに伝えるという意識になると、自分らしい言葉で伝えられるのではないかと。わたしたち京都市民という主語を、私に変えてみることにしよう。

田口委員

大竹委員の意見に関連して、1項目1人ではなく、1項目2人と話すのもいいと思う。

都地委員

このメンバーは語り部として、8つのめざすまちのすがたのそれぞれが持つ共通言語で話していくことになると思うが、あるフレーズや1文に対して、ワードの変更履歴機能のような形で、それぞれがコメントできるようになると、この文章自体に物語が加わるのではないかと。

司会

現行基本構想の完成形は読んだことはあっても、完成に至るまでにどのような社会背景で、どのような議論がされてきたのかということは、なかなか知ることができない。今回は、数十年後に、長期ビジョンが作られた経緯を知りたいとなった時に、参照できるように見える形で残しておくことも重要ではないかということだ。

松井市長

このような公開での会議などのメイキングは絶対に残した方がいい。これだけ情報が氾濫している中で、どのように編集し、後にこのビジョンに関心を持った人が、細かな策定プロセスまで辿ることができるようにするのが重要である。

田口委員

私は雑誌の形式でもいいと思った。

松井市長

A Iなどを駆使して、後から検索することは容易になると思うので、いろいろなものを残しておくのがいい。

大竹委員

私は大学の研究において、行政が公表している資料と、実際の地域住民がどのような意見を持っていたのかという差について調査している。その中で難しいと思うのは、年数が経つほど、公文書などの整理されている資料は残っていても、地域住民の生の声を記録した資料が残っていないということである。そのため、当時の人に聞いて、語ってもらうし

かない。きちんとした文書には残らないような意見やアイデア、参加者の反応などを残しておくで将来役立つかもしれない。

松井市長

策定過程自体も残しておいてもらった方が良いと思う。現行基本構想を起草された鷺田清一氏は当時、何十回も推敲されたのだが、その経過は残っていない。推敲の過程だけではなく、パブリック・コメントを実施して、どのような意見が集まったのか、あるいは市会や審議会においてどのような議論が行われたのかなどを、どのような形で見える化していくかというのも重要である。

おそらく多くの場合は、非常に手間が掛かり、情報の取扱いに関する議論もあるので、どの程度実現できるかわからないが、少なくとも公開で行う議論については、手法の工夫も含めて考えていただけると良いのではないかと。このような議論を経て、まちの在り方を考えたということも含めて、京都のアピールポイントになる。

伊住委員

冒頭で松井市長がおっしゃった、ビジョンではなく、別の言葉に切り替わっていくということか。

松井市長

ビジョンというと、70年代の通産ビジョンなど、その当時はビジョンに新しい思いを込めているが、やはり行政が方向を指し示すものというイメージがある。それよりも、和言葉もしくは漢字の方が良いのではないかという意味である。私がビジョンという言葉にある種の先入観を持っているということかもしれない。

伊住委員

名称が確定してからでないと、例えば、ハッシュタグを付けて発信するといったことができないかと思うが、いつ頃名称が決まるのか。

西田都市経営戦略監

パブリック・コメント案を提示する次回の審議会において、ビジョンではない名称を提示する必要があると考えている。事務局としては、奇をてらった名前にするという考え方はない。サブタイトルを付けるかどうかというのは、パブリック・コメントの中でも御意見をいただきたいと思う。例えば、これまでと同じ「基本構想」とすることで、計画よりも長期間で理念的なイメージを持っていただけではないかと考えている。

伊住委員

いくつかの、似て非なる名称が近しいエリアにあるので、何についてみんなが話しているのかという名称は確定していた方が良くないかもしれない。

司会

残り時間が少なくなってきたので、本日の議論のまとめと今後の進め方について話をさせていただく。本日出てきた様々なアイデアをベースに、一度事務局案として取りまとめたうえで、次回の未来共創チーム会議では、その案をもとに議論していただきたい。

本日出たアイデアは大きく2つかと思う。まず、仲田委員から提案していただいた「X with ビジョン」である。ビジョンと関係のなさそうなものとコラボレーションし、入口を多数用意することで、様々な人に伝わっていくのではないかというアイデアであった。また、皆さん自身が語り部として、自分が共感する部分を、自分のコミュニティに向けて、自分の言葉で伝えていくというアイデアも出ていた。それは一人一人が個別にお話する場合もあるだろうし、2人1組となり、対談形式で伝える手法も考えられる。ポッドキャストや Youtube を活用して、いつでも聞けるようにしたり、ワークショップを開催したりするなど様々な方法が考えられる。

他には、座席に二次元コードを貼るなど、日常生活の中にビジョンを知るきっかけがあると、ビジョンを届けにくい方に対しても、気づきを与えるきっかけを作れるかもしれないというのは面白い試みだと思う。

都地委員

小中学生に伝える場合は、下敷きやクリアファイルを使うのが有効ではないか。意外とそういったものを見て、深いと思うことがあるかもしれない。

大竹委員

私の地元では、地元の特産品や良いところを集めたクリアファイルが売っているので、ビジョンの好きなキーワードやフレーズをクリアファイルにしても面白いと思う。私もそのクリアファイルを友人に渡して、地元の魅力を布教している。

仲田委員

「着る長期ビジョン」というのはどうだろうか。

都地委員

キーワードなどが書かれたTシャツを作って着ると話のネタにもなると思う。

司会

「布教」というキーワードが出たのが面白いと思った。つい誰かに広めたくなるという人が1人でも増えたらいいのではないかと考えた。

大竹委員

長期ビジョンの内容に関するクイズや検定を作るのはどうか。

松井市長

そのように、ある種いじってもらって、身近に感じてもらえるといい。行政の立場ではなかなか難しいが、皆さんならできる。

司会

時間となったので、以上をもって、第7回京都市未来共創チーム会議を閉会とする。